図書を活用し、主体的に課題追究できる生徒の育成

―　百科事典を活用して　―

Ⅰ　はじめに

Ⅱ　本年度の実践
　１　図書・情報の活用
　２　図書館運営・連携
　３　読書活動

Ⅲ　今後の課題と問題点

研究の概要報告（読書・学校図書館）

第 73 次教育研究愛知県集会には、10 本のレポートが提出された。読書活動を効果的に取り入れ、学校図書館を有効に活用するために、各分会で工夫された実践が報告された。

「図書を活用し、主体的に課題追究できる生徒の育成」「自ら本をてに取り、学びにいかすことができる児童生徒の育成」「読書を通して他者との交流を深め、互いの成長につながる活動」など多様な内容が寄せられた。その中で、仲間とともに読書活動にとりくみ、本に親しむことで、読書意欲を高める実践が報告された。また、図書資料を活用し、調べ学習を行うことで課題解決能力を高める実践や、環境整備を行い、利用しやすい学校図書館づくりをめざした実践も報告された。

図書の活用については、古典作品について図書資料を使った調べ学習を行い、登場人物の心情や考え方を読み取ることで、作品と自分をかかわらせながら考えを深めた実践が報告された。また、作品づくりに図書資料とタブレット端末を活用し、自らの考えや気持ちを表現する楽しさを実感する実践も報告された。

情報活用については、図書資料の利点を知った上で、学校図書館を利用した調べ学習の機会を増やすことで、情報活用能力を高める実践が報告された。百科事典の特徴をいかしながら、生徒の欠けている視点を補う思考ツールを活用した結果、主体的に課題追究しようとする意欲を高める効果があることも報告された。調べた情報をもとに、班での話し合い活動やグループワークを通して、他者の意見を知り、自分の考えを広げ、深めることにつながった。

図書館経営・連携については、配架を見直したり、本の選定や紹介に図書委員や一般の生徒を参加させたりすることで、より利用しやすい環境を整えた学校図書館づくりをめざした実践が報告された。また、授業内容に関連した図書資料を充実させて、授業で活用することで、すすんで本を探し、学びに生かそうとする生徒の姿が見られるようになった。

読書活動については、ビブリオバトルによる対話的な読書活動を通して、作品を読み深める実践や、異学年交流を通した読み聞かせを行うことにより、互いに成長し合うことをめざした実践が報告された。また、絵本をつくったり、その絵本を何度も読んだり、作品に出てくるオノマトペを身体で表現したりして、仲間とともに言葉のイメージを広げることで、本を読むことの楽しさを味わう実践も報告された。地域ボランティアによる読み聞かせ活動は、本に対する興味を深め、児童の本を読みたいという意欲を高めることにつながった。

今後も、学校司書や地域の図書館と連携をはかり、子どもたちが主体的に課題解決できる環境が整った学校図書館をめざしたい。また、子どもたちが読書に親しみ、楽しむことで、豊かな人間性を育むことができるような学校図書館づくりをすすめていきたい。

（宮武里衣・吉田高寛）

報告書のできるまで

10 月 21 日、愛知県産業労働センターにおいて、県集会が開かれ、「読書・学校図書館」の分科会では、第 72 次教研までの成果と課題をもとに、子どもたちの心を豊かにする読書教育の推進について活発に討論が繰り広げられた。司会者や教育課程研究委員の適切な支援と、助言者の明確な指導を得ながら、多くの成果を収めることができた。

この報告書は、県集会での提案とその討論の内容をまとめたものである。ここに至るまでに、助言者をはじめ、関係の諸先生方にご指導いただいたことに深い感謝の意を表す。

助　　言　　者	宮武　里衣（愛知学泉大学）　吉田　高寛（名古屋・津賀田中）
教育課程研究委員	遠山　友加里（一宮・木曽川西小）　水野　徹（名古屋・東築地小）
	杉浦　恵理子（安城・丈山小）　原　由布子（名古屋・千成小）
	木村　俊介（春日井・丸田小）　岡本　侑馬（碧南・西端中）
	安井　智奈美（名古屋・明徳小）　平松　亜弥美（豊橋・八町小）
	福永　えりな（岡崎・山中小）

Ⅰ　はじめに

読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身につけていく上で欠くことのできないものといわれている。しかし、スマートフォンやゲーム機等の情報端末が発達し、さまざまなＳＮＳや動画配信サービスが普及するなか、子どもたちの生活も変化し、「読書離れ」が指摘されている。今日、子どもたちに読書の楽しさを味わわせ、読書を通して豊かな心を育んでいくことは重要な課題である。

また、本を介して意見や感想を交流することで、人と人とがつながりをもち、心を通わせていくことも求められている。ＳＮＳをきっかけに起こるトラブルや事件は、人との関係の希薄さが引き起こしている一面がある。こうした子どもたちに読書による人との間接体験をもたせたり、友だちや教員とのふれあいの場をもたせたりする活動を積極的に取り入れることが人とのかかわりのよさを感じさせる上で有効であると考える。

そして、学校現場では学習者用タブレット端末が日常的に活用されるようになり、生成ＡＩや対話型ＡＩなどにも関心が寄せられている。情報化が高度にすすんだ現代、子どもたちにも、膨大な情報の中から情報を収集・活用していく力が求められている。学校図書館では、以前より情報活用能力の育成を課題の一つとしてきたが、より一層の整備・充実をはかるとともに、情報を収集するだけでなく、自分にとって本当に役立つ情報であるかを正しく判断・選択しながら自らの課題解決に活用していく技能を高める指導を行っていくことが大切である。

こうしたことから、現代の子どもたちにとって必要な学校図書館教育の役割は、次の３点であると考える。

○　読書の楽しさを味わわせ、すすんで読書に親しむ態度を育て、豊かな感性や情操を育む「読書センター」としての役割
○　友だちやいろいろな人との心の交流を通して、豊かな人間形成をはかるための「学びの場」としての役割
○　利用しやすい環境を整え、自らの課題を解決するために、図書資料を効果的に活用する能力や態度を培う「情報・学習センター」としての役割

学校司書の配置がすすめられ、司書教諭と学校司書との連携による実践の報告も増えている。また、学習者用タブレットをはじめとするＩＣＴ機器を活用した、新しい学びの形も模索されている。子どもたちが多くの本と出会い、自らの課題を解決していくことで、現代社会を力強く生き抜く力を養い、よりよい未来を築いてくれることを願っている。

Ⅱ　本年度の実践

１　図書・情報の活用

１　主題設定の理由

近年では生徒一人に一台タブレット端末が用意され、授業でインターネットを使った調べ学習も気軽にできるようになった。しかし、タブレット端末を使った調べ学習の姿をみると、「生徒はインターネットを使った調べ学習で主体的に課題追究ができているのであろうか」という疑問がわいてきた。

そこで実際に、中学１年生の生徒にアンケートをとった。「調べ学習では何を使って調べますか」の問いに対して、回答者全員が「インターネット」と回答し、図書と答える生徒はいなかった。また、「インターネットを使った調べ学習は楽しいですか」の問いに対して、「どちらともいえない」と４割が回答した。また、「インターネットを使って調べるときに困ったことがありますか」の質問に対しては、「難しい言葉でわからない」、「正確な情報かわからない」、「どんな検索ワードを入れたらいいかわからない」、「情報が多すぎる」という回答が多かった。

このアンケートから、インターネットを活用する際の難しさが、主体的に課題追究しづらくしているのではないかと感じた。そこで、生徒が調べたい情報がわかりやすく正確に書かれている図書があれば、主体的に学習課題を追究することができるのではないかと考え、百科事典を活用することにした。

百科事典の情報は「簡潔で、わかりやすい」「書かれていることの信ぴょう性が高い」という利点がある。特に「わかりやすい」というのは生徒が課題を見出し、解決をはかるうえで大切な要素である。この百科事典の情報を調べ学習の「基点」にすることで、興味を広げたり、より詳しい情報を他の図書やインターネットで情報収集したりするのに役立つのではないかと考える。そこで、百科事典を基点に図書やインターネットを活用するとともに、思考ツールや言語活動を取り入れながら課題解決をすることで「学ぶ楽しさ」を感じ、主体的に課題追究できると考えた。そこで本研究の研究主題を、「図書を活用し、主体的に課題追究できる生徒の育成－百科事典を活用して－」とし、研究を始めることにした。

２　めざす生徒像

主題の実現にむけて、めざす生徒像を次のように設定した。

（１）自ら追究課題を見出し、課題設定ができる生徒

（２）課題解決のために、情報媒体の特性を理解して活用し、主体的に追究する生徒

３　研究の仮説とてだて

仮説１　課題設定の場で、百科事典の特長をいかしながら課題を練り上げる工夫をすることによって、追究したいことを生徒自身で見つけることができ、主体的に課題を追究することができるであろう。

仮説２　追究活動の場で百科事典の情報を基点に、課題解決の方法を学ぶ機会を位置づけることによって、主体的に課題を追究することができるであろう。

仮説１のてだて

①百科事典の活用に慣れ親しみ、特徴を知る機会の設定

図書館司書と連携し、小学校での学習に不十分なところを支援する。また、社会科の学習の中で百科事典を活用し、百科事典の特徴をいかす機会を設定する。

②言語活動を取り入れた課題設定の場の設定

百科事典を活用しながら話し合う言語活動を取り入れ、課題を設定する時間を十分にとる。

③課題設定をサポートする思考ツールや資料の活用

思考ツールや課題設定のためのマトリクス資料を活用して課題設定を行う。

仮説２のてだて

①百科事典の情報を基点にした追究活動の展開

百科事典に掲載されている基本情報を基点に、図書やインターネットによる追究活動を位置づける。情報収集の方法と活用の仕方を学ぶ時間を設け、資料を効果的に活用できるようにする。

②情報を整理し、思考を深めるための言語活動

収集した情報を理由や根拠を示しながらまとめられるように、思考ツールを活用する。同じ領域の課題や関連のある課題を設定している生徒どうしで課題追究の現状について報告したり、意見交換をしたりする場を設定する。

③他教科と連携した教科横断的な学習展開

国語科で学んだ引用や要約の方法をいかしてまとめたり、追究する課題に合わせて、各教科の教員から専門的な内容について助言を得たりする機会を設ける。

４　抽出生徒について

仮説やてだてが有効であったか、A を中心に生徒の変容を追う。

A の実態	願う生徒の姿
授業では、言われたことをきちんとやるが、主体性に乏しい。「インターネットを使った調べ学習は楽しいですか？」の問いに対し、「どちらとも言えない」と答え、インターネットの活用で「難しい言葉でわかりづらい」と回答した。	わかりやすい情報を得て資料の取り扱いを学ぶことで、自ら思考を広げながら調べたいと思うことを見つけられるようになってほしい。調べ方やまとめ方を学び、最後まで追究活動に意欲的にとりくめるようになってほしい。

５　実践と考察

（１）　百科事典の活用に慣れ親しみ、特徴を知る機会の設定（仮説１のてだて①）

百科事典を活用の使い方についての学習は、小学校の国語の授業で行ってきているが、生徒に百科事典を活用の経験を尋ねたところ、「使ったような気はするけど、よく覚えていない」という声が多かった。そこで、図書館司書による百科事典の使い方を確認し、百科事典の面白さを感じられるような授業を設定した。動画を視聴して使い方を確認した後、一人一冊百科事典を持たせて、ワークシートに示された言葉を見つける活動を行った。生徒はワークシートに書かれている言葉以外にも、調べる過程の中で見つけた語句について近くの生徒とわかったことを確認しながら活動を行っていた。

また、社会科の歴史の授業でも百科事典を活用した（資料１）。生徒が活用しやすいように、百科事典を６セット用意してグループで１セット活用できるようにした。このような、百科事典を活用することに慣れ親しむ実践を１か月ほど行った。その後に生徒に取ったアンケートでは、「教科書と百科事典を活用する学習は興味をもって学習できる。」という回答が多く、A の振り返りからも百科事典を活用することで学習の理解が深まったことが感じられた（資料２）。

資料１　百科事典を活用した社会科授業の概要

①元寇以後の鎌倉時代の社会の変化についての追究課題を５つ提示し、百科事典を活用してジグソー学習→エキスパート学習→グループ共有という流れの学習過程で話し合いを行った。

②室町時代と鎌倉時代の幕府のしくみの共通点や違いについて百科事典を使って調べて考える。

③室町時代の産業の様子や民衆の生活について、教科書にある語句について調べ、理解を深める。

資料２　A の振り返り

桑とか麻とか最初全然わからなかったけど、調べてみると理解できて関連付けて他の語句も調べてみたりしてとても学びが深まったし楽しかったし理解もとっても深まりました。

（２）言語活動を取り入れた課題設定の場の設定（仮説１のてだて②）

２年生の社会科地理分野で「日本の特色を見つけよう！」という単元において、生徒は日本の特色について①自然環境②人口③資源・エネルギー④産業⑤交通・通信の５つの視点からとらえて学習してきた。そのまとめの授業として、特色と同時に見えてくる日本の課題や危機について個人で追究課題を設定し、調べ学習を行った。

生徒が主体的に課題追究を行うためには、言語活動を取り入れながら３時間程度課題設定の時間を多めにとり、自分の興味や関心から課題設定ができるようにすることが大切であると考えた。まずはこれまで学習してきた日本の地理的な特色から見えてくる日本の課題について教科書や百科事典を活用しながら話し合いを行った。日本の課題の中から「もっとも解決しなければならない課題は何か？」というテーマでグループ討論し、班の意見を出し合って共有した。クラス全体での共有では１３の日本の課題が生徒からあげられ、もっとも解決しなければならない課題については「少子高齢化」が最多で、「エネルギー自給率が低い」、「食料自給率が低い」が次いで多かった。後の課題設定後のアンケートでは、日本の課題についての話し合いが課題設定に「役立った」と回答する人が多くを占めた（回答者２７人中２５人）。

A はグループの生徒と活発に意見を交換する姿が見られた。資料３の A の振り返りの下線部に書かれていることは、他の生徒と意見を交換したことによる A の考えである。普段こういった振り返りは記載内容が少なく、浅い振り返りとなってしまうことが多い A であるが、言語活動によって自分の関心や考えが整理されたことが読み取れる。

資料３　A の振り返り

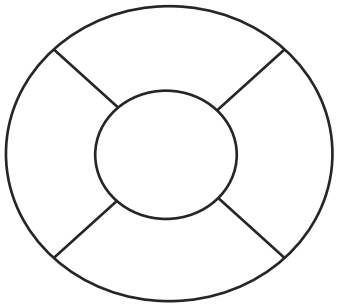
（前略）個人的には食料自給率が下がっているのが問題だと思いました。海外から輸入ができなくなってしまったら食べ物が少なくなったり、値段が上がったりしてとても困ると思いました。だから解決策を調べたいと思いました。

（３）課題設定をサポートする思考ツールや資料の活用（仮説１のてだて③）

個人の追究課題を設定する場面では、自分の調べたいことを「問い」として立ててテーマ

設定ができるように「テーマをしぼりこむ支援」と「問いを立てる支援」をてだてとして行った。「テーマをしぼりこむ支援」ついては「ペンタゴンチャート」をもとに「円形チャート」（資料４）を作成してテーマを絞り込めるようにした。「問いを立てる支援」として、「謎作成マトリクス」と題した質問疑問マトリクスを資料として提示し、参考にすることで「問い」を立てやすくなるように支援した。

資料４ 思考ツール「円形チャート」



生徒は、まず前時の話し合いででた日本の課題の中で興味がある課題を選び、その課題について百科事典で調べながら思考ツールを活用して絞り込んだり、関連した事象から興味を広げたりして課題設定を行った。A は「食料自給率が低い」という日本の課題からテーマを設定しすることにした。「円形チャート」には、自給率の低いものやどこの国から輸入しているのかということに関心を広げた形跡が見られた。また、百科事典の「食料自給率」の説明から関連ワードの「食料問題」の説明を読み、「食料自給率の低い日本はほかの国以上に危険な状態になる可能性がある。」という記述に関心を寄せ、「食料自給率が低いことによってどんな危険があるのか？」というテーマを最終的に設定した。思考ツールの記述が直接テーマ設定につながることはなかったが、思考を可視化することで問いが自分の興味に沿ったものか吟味することができた。そして、もう一度百科事典に立ち返ったことで「問い」を立てることができた。授業後のアンケートでは、思考ツールや「謎作成マトリクス」が課題設定に役立ったという回答が多くみられた（２７人中２５人が「役立った」と回答）。

（４）百科事典の情報を基点にした追究活動の展開（仮説２のてだて④）

百科事典には、用語の定義から説明が始まり、端的にわかりやすく解説が書かれている。中には拡大項目といって見開き１ページにわたって詳しく書かれている用語もある。まずはこの百科事典の基本情報を情報収集の出発点としたいと考えた。生徒は調べたいことがあるとすぐにタブレットで調べようとする実態があった。そこで、１時間目は百科事典から、２時間目は図書から、３時間目はインターネットから情報を集めることを基本として、それぞれ情報収集の手段のメリット・デメリットを授業の最初で確認した。

	メリット	デメリット
百科事典	簡潔にわかりやすくまとめられている 信頼性が高い	冊数が多い 情報が古くなっている可能性がある
図書	テーマについて専門的にまとめられている	情報が古い可能性がある
インターネット	情報を得やすい、見つけやすい	サイトによって信頼性が異なる

百科事典は６セット用意し、班で使用した。図書については中央図書館から生徒のテーマに沿った視覚的にもわかりやすいものを教員が選んで借りて用意をした。インターネットでは、テーマと関連のある各省庁のサイトや省庁がリンク集として掲載しているサイトなどを信頼度の高いサイトの一例としてあげながら示した。A のテーマについては「食料自給率が

低い」という日本の課題から学習課題を設定した生徒どうしでグループを組み、関連する図書をグループで共有できるようにした。

A は食料危機についての図書を読み、世界が食料危機になると輸入に頼っている日本も食料危機に陥ることに気付いた。同じグループの他の生徒と自然と情報をやりとりする姿が見られ、たくさん輸入したくさん捨てている食品ロスの多い日本の問題にも気付いた。

A はこの３時間で各資料から資料５ように読み取った。追究を深めたことがうかがえる。

資料５

百科事典から：長期的に見て世界の食糧生産が追い付かなくなることが心配されていること。

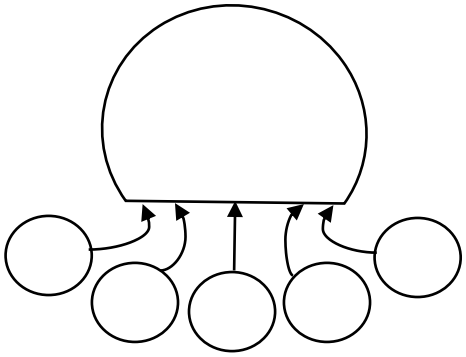
図書から　　：飢えでなくなる人が多い一方で、食料をたくさん輸入し捨てている国があるということ。

インターネットから　：今戦争が起きた影響で小麦が高くなっているおり、日本にも影響が出ている。

（５）情報を整理し、思考を深めるための言語活動（仮説２のてだて⑤）

設定した課題について個人で追究する中で、自分の設定した課題について他の生徒と共有する場を設定した。追究課題の近い３人程度でグループになり、一人５分程度の時間を設け、①自分の設定した課題②課題についてわかっていること③質問やアドバイスという流れで行った。似たような追究活動を設定している生徒どうしでグループを組んだため、どのグループも活発に話し合いをする様子が見られた。

資料６ 思考ツール「クラゲチャート」



課題追究の場面においても、生徒が得た情報を整理しやすいように思考ツールとして「クラゲチャート」（資料６）を提示して、自分の追究課題の答えとなる情報と、その答えの説得力を高めるための根拠となる情報を整理し、まとめにいかせるようにした。A はテーマの答えとして「他国から日本に輸出する食料が減ると、日本が苦しむ」という答えを出し、その根拠と理由として「食料が少ないと輸出しなくなる」や「戦争などで値段が高くなる」などの理由をクラゲチャートに書き込んでいた。

（６）他教科と連携した教科横断的な学習展開（仮説２のてだて⑥）

生徒が課題を追究・整理する場面で、社会科以外の授業や教員の指導を受けることができるようにした。国語の授業では、引用の方法を学習した。正しい引用のルールについて学び、例文を活用して資料から必要な文章を引用する練習をした。授業後の振り返りアンケートでは、引用のルールについての理解度（５段階）の平均が３．９３と高く、振り返りでも今やっている社会科の調べ学習でいかしていきたいという回答が多くみられた。（資料７）実際にまとめのレポートにおいて、図書資料の情報を記入している生徒が多くいた。また、追究内容に合わせて、「他教科の教員に助言を求めるとよい」と話した。A は理科教員から「食料危機を想定して、昆虫を食べる研究がされている」ことなどを聞き、情報を集めていた。他教科と連携することで「学んだことをいかしたい」という意欲をもって追究活動にとりくむことができたと感じる。

資料７　A の振り返り

引用のルールを守ってやらないといけないのでしっかり守りたいと思いました。社会の調べ学習のまとめでいかしていきたい。

6　成果と課題

（１）　仮説１の成果

百科事典の使い方を確認した授業後のアンケートでは、百科事典の楽しさ、わかりやすさを感想に述べる生徒が多くいた（資料８）。その後、時間をかけて授業でも何度も使っていくことで活用の仕方に慣れ、その後の各自の追究活動にスムーズに移行できたと感じている。また、生徒のアンケートからも話し合い活動が課題設定に役に立ったという回答が多くあった。A の振り返り（資料３）からも百科事典や教科書の基本的な情報をもとに話すことで理解が深まっていき、生徒自身の興味が広がりやすかったと考える。てだて③の思考ツールや資料の活用では、生徒 A の思考ツールの活用を見ていくと、生徒の課題設定までの形跡が思考ツールからも読み取ることができた。生徒のこのような姿やアンケートから仮説１のてだては有効であったと考える。

資料８　生徒の感想

百科事典を使うと教科書よりわかりやすく、細かいところまでわかるので内容がしっかりとわかった。百科事典にはいろいろなことが書かれていて、面白そうなものや、難しいものなどもあるからいろんなものを見られたらとても楽しそうだと思った。

（２）仮説２の成果

てだて④では、各授業で基本となる情報収集の方法を指示することで必然的にその媒体を活用する機会をつくることができた。また活用する図書も生徒がテーマとわかりやすい本を厳選して選んで図書館に配置することで生徒は自分の追究活動に必要な図書を探し、図書に興味をもって追究活動を行っていた。A はインターネットよりも「食料危機」に関する図書を閲覧し、活用しながら情報を集めて追究活動を行うことができていた。この学習以前は、問いに対してすぐにインターネット検索するばかりであった生徒が自ら図書で調べる姿が数多くみられた。生徒の学習課題にあった図書の充実と機会をはかることによって主体的に追究活動にとりくむことができたと考える。

てだて⑤のグループでの話し合いについては、とても活発な話し合いの様子が見られた。中には、「先生、早く話し合いが終わったので、調べ学習の続きをやってもいいですか？」という声も多く聞かれた。自分の調べたことを伝えることによって追究課題がより自分事になるとともに、追究課題に対する自分の理解も深まり、意欲が高まったと考える。てだて⑥については、他教科の先生方からの指導で、専門的でわかりやすいアドバイスを受けたことにより、もう一歩詳しく調べようしたり、丁寧にレポート作成したりしようとする姿が見られた。A の振り返りからも深く追究できたことへの自信が高まったことがわかる（資料９）。

資料９　A の感想

図書では、知りたい情報が絵や写真グラフなどでわかりやすく書かれていたので、理解しやすかった。食料危機の問題を調べて、日本はこのままじゃヤバイと思ったし、理科の先生が言っていたような昆虫を食べるようになるのはちょっといやだなって思ったので自分でできることをしていきたい。

（３）課題

課題設定の場面では、話し合いによって生徒の追究テーマが同じようなものに偏ってしまった。また、生徒が思考ツールの活用に慣れていないため、うまく活用できない様子が見られ、日頃から思考ツールを目的に合わせて使えるように指導を継続していく必要性を感じた。

本研究では、百科事典を活用するために、百科事典を６セット用意して一人が活用しやすいようにした。しかし、普段では学校に１セットしかないため、クラス全体で活用する際に

使いづらい点がある。百科事典の有効性は確認できたので、ほかの活用方法も考えていきたい。また、生徒のテーマにあった図書資料が学校に少なかったので、各教科の学習内容に合わせた図書の充実も必要であると感じた。

課題解決に大切な情報活用能力については、一単元の実践で身につけることがなかなか難しいと感じた。図書があっても学習用タブレット端末で調べようとする生徒も見られ、インターネットを使った情報収集が、生徒には染みついているように感じる。生徒の情報活用能力を高めていくには、図書を扱うことは大切であるが、一単元では不十分であるため、教育活動全体で継続的・計画的に指導していく必要があると感じた。今後も教科学習において、常に生徒が主体的に深く追究する課題設定や追究活動の場を用意し、百科事典や図書資料活用する機会を設けていきたい。

２　図書館運営・連携

委員会活動などを通して、生徒とともに、学校図書館の整備や図書選定を行う実践、生活と結びつけながら学びを深めるために、実物と図書資料を並べるなどのてだてを講じた実践が報告された。

３　読書活動

級友とその本のよさについて話し合ったり、想像力をもってオノマトペなどで表現したりする対話的な読書活動を通して、物語を読み深めることや純粋に読書を楽しむことにつながることを検証した実践や、兄弟学級などの異学年や教職員による読み聞かせをコミュニケーションツールとして行い、豊かな心や情操を養わせる実践が報告された。

Ⅲ　成果と今後の課題

本年度の県集会では、学校司書や市立図書館と連携をはかりながら、教科や単元の学びにつながる本を、子ども自らが選択して、問題解決のために活用していく実践についての討論が中心となった。また、物語だけではなく、図鑑や百科事典などの図書資料の活用をてだてとして講じる有効性について話し合われた。

個別最適化を推奨する現在の教育においては、学びの材料として図書資料を活用したり、物語の内容を読み取りながら理解したりすることが重要性である。また、インターネットと図書資料による調べ学習のそれぞれの利点を子どもたちが理解したうえで、効果的に活用していかなくてはならない。さまざまな教科において読書・学校図書館との併用をすすめていくための実践報告、および、活発な意見交換が行われた。

情報交換では、図書資料の活用、図書館運営、読書活動をすすめていくための、教員と学校司書との連携や保護者とのかかわりついて情報交換がされた。担任する学級とは異なる学級で読み聞かせを行い、交流の中で読書の楽しさを感じさせるという事例や、図書資料として活用したい図書を学校司書と連携しながら選定するといった事例が紹介された。

限られた時間の中でも、読書活動や図書の大切さを子どもに実感させることができる支援や教育をめざし、各自治体の図書教育の動向が意見交換された。

今後に残された課題は以下の３点である。

⑴　インターネットの普及に伴う読書離れに対して、調べ学習での図書活用や、学校司書との連携を積極的に行い、それらを何年もかけて積み重ね読書を習慣化していく工夫

⑵　教科学習の中で、子どもたちが課題解決や自分の意見をもつ材料として図書を活用ことができるように、思考ツールなどを用いて使いたいと思わせるような工夫

⑶　子どもたちが物事や学びに対して、具体的な意見や根拠をもてるように、読書活動や図書活用、図書館連携を行う工夫

学校の実情はさまざまであるが、これからも、子どもたちが読書を楽しみ、読書活動が豊かな心を育むとともに、学びの基礎を築くものになるようとりくみを続けていきたい。